
ある人のバレンタイン

愛華蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある人のバレンタイン

【Nコード】

N3957V

【作者名】

愛華蝶

【あらすじ】

バレンタイン…それは女の子が男の子にチョコをあげる日…だけではない！？

今回はオリキャラを思いっきり活躍させてみました！

（前書き）

…思いつきり季節はずれ…（泣）

誤字、脱字、ありましたらすいません！！

2月14日

女子が色めき立ち、男子が期待に胸を膨らませるこの日。一件の甘味所で悩んでいる男が一人。

「…主人。このひとときわデカイチョコを貰えるだろうか」

前髪から覗く眼帯、後ろで束ねた長髪、口にくわえたアイス棒。攘夷志士、桂一派の前原一志である。

「お待さん。こんなにデカイチョコなんて買って、一体誰にあげるんですか？」

「知り合いの糖尿病寸前の馬鹿にだ」

チョコを受け取った前原はそのまま店を出ていった。

「さて、銀時はよしと…あとはどうしよう」

そもそも、何故彼がバレンタインにチョコなんて買ってるかと言つと…

遡ること数年前…

「そついえば明後日はバレンタインですね」
松陽先生は笑顔で銀時達に話しかけてくる。

「ばれんたいんってなーに？」

銀時が不思議そうに聞いてくる。

「バレンタインとは、女の子が好きな男の子や、お世話になった人達にチョコレートや手作りのお菓子をあげる日ですよ」

「マジで！？チョコもらえんの！ラッキー！」

「貴様などが貰えるわけがなかつ」

はしゃぐ銀時にぴしゃりときつい一言を浴びせる桂に続いて高杉も言う。

「感謝されるようなことも何もしてないしな」

「んだとテメーら！！」

そのやりとりをそばで聞いていた前原は、その日の夕方に松陽にあるお願いをする。

バレンタイン当日。前原は銀時、桂、高杉の3人に小さな袋を渡した。

「？何コレ」

銀時が聞くと、前原は恥ずかしそうに俯きながら、

「……………チョコ……」

とだけ呟いた。

「チョコ？何でいきなり？」

「…もしかしてお前… バレンタインだから…とか？」

高杉の言葉に前原の顔が更に赤くなる。

「でも、バレンタインって、女が男にあげるのではないのか？お前は男だろう？」

前原がもしもじしていると、松陽が後ろから顔を出してくる。

「一志はあなた達にお世話になったから、チョコをあげたいと言ってきたんですよ」

「お世話？俺ら何かしたっけ？」

銀時が首を傾げていると、前原が話し出した。

「…僕…天人と人の血が混ざってるから…友達とか…1人も出来なかったけど…銀時や小太郎や晋助は、僕をふつうの人として見てくれた…。それが嬉しかったから…」

そこまで言つと、また赤くなって俯いてしまった。

「……………」

しばらく黙ったままだった銀時が口を開いた。

「…コレ、お前が作ったの？」

「…うん…先生に教えてもらって」

すると、銀時はおもむろに袋を開け、中身のチョコを口に入れた。

「…うめえ」

「え？」

「うめえよコレ！お前天才だな！」

すると前原の顔に自然と笑みがこぼれた。

それからというものの、前原は毎年バレンタインになると、銀時、桂、高杉、そして攘夷戦争が終わってから坂本にも何かしらのプレゼントを送るようになった。

「…坂本と高杉にも買ったし、小太郎は準備は出来てるし」

そう言うと、前原は真っすぐ港に向かった。

「何の用でござるか？」

そこにいたのは、ヘッドホンにサングラス、三味線を背負った鬼兵隊の人斬り万斉こと、河上万斉だった。

「毎年のことだろう。これを高杉に渡してくれ」

前原から差し出された小さな箱を受け取った後、万斉は「ところで…」と言う。

「何だ？」

「鬼兵隊に入ってくれる…と言う件は…」

…チャキツ…

前原が刀に手をかける。

「答えは同じだ。あまりしつこいようなら殺すぞ」
「ジョーダンでござるよ」

そっぴい残すと、万齊は立ち去って行った。

坂本のプレゼントは宇宙郵便で快援隊宛てに郵送した。

「あとは銀時か…」

（確か去年はポストにinだったな…）

そんな事を思い出しながら万事屋に行く途中。

「あれ？前原さん？」

志村新八が買い物袋をさげて歩いていた。

「新八くん！ちょうど良いところに！」

「え？何ですか？」

「コレ、銀時に渡してくれないか？」

そう言って前原は新八にバカでかいチョコの入った箱を渡した。

「別に良いですけど…何ですか？コレ」
「…ちよつとな…」

その日の夜

「ただいまあゝ」

首もとの大きな鈴を揺らしながら小さな女の子が帰ってくる。

「お帰り。優羅」

「いち。何作ってるんだ？」

前原は何かの生地をこねていた。

「パンか？」

「違うよ。これは小太郎にやるものだ」

前原はなぜかとても嬉しそうだった。

「頭。おまんに送りもんじゃ」

笠を被った女性、陸奥が坂本の前に縦長の紙袋を置く。

「送り物？誰からじゃ？」

「前原、だそうじゃ」

「おお！いちかぁ！」

どれどれ…と袋を開けると、中身は酒瓶だった。

「酒…か？」

陸奥が訝しげに聞くと、

「ああ。毎年送ってくれるんじゃない」

「……」

高杉は万斉から受け取った箱を開けて中身を見ていた。中に入っていたのは煙管用の煙草の葉だった。

「…フツ」

高杉は薄い笑いを浮かべた。

「銀さん。前原さんからコレ渡してくれて」

（…今年もきたか…。確か去年はポストン中に入ってたっけか？）

「銀ちゃんそれ何アルか？…うわぁ！チョコアル！！しかも特大の！」

入っていた手紙には『貴様は糖尿病寸前だからな。神楽や新八くんと仲良く分けて食べるよ！』

「…ケツ！余計なお世話だよ！」

「……………」

桂が戻った時にはすでに眠ってしまった前原と優羅がいた。そしてそのそばには手打ち蕎麦が。

『今日は手打ち蕎麦だ。好きなだけ食べるよ』

置き手紙を読んだ桂は優しく笑い、寝ている前原の頭を撫でた。

「…ありがとう」

その言葉は、桂だけでなく、坂本、高杉、銀時と同じ気持ちだった。

(後書き)

優羅「いちー！小太郎ー！これあげる！」

そう言っで差し出してきたのは、生きたままのマグロ！

桂ノ前原「せめて調理してこい！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3957v/>

ある人のバレンタイン

2011年10月9日09時46分発行